

# 1月1日 神の母聖マリア

民 6:22～27 ガラ 4:4～7 ルカ 2:16～21

## 1. ガラ

v.4 「しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。」

主イエス・キリストのかつての誕生は、神話でもなければおとぎ話でもありません。神の時が満ちて、つまり神が御計画になっていた時が遂に来て、神はその御子を一人の女マリアから誕生させ給いました。彼女にとってはそれは「月が満ちて」(ルカ 2:6)であり、天使ガブリエルが告げた「神が約束されていた時期」(創 21:2)でありました。

律法の下にあるイスラエルの民の一人として御子を誕生させるために、神はマリアを母としてお選びになりました。

v.5 「それは、律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の子となさるためでした。」

御子はユダヤ人として誕生されましたが、ユダヤ人の救い主であるだけではなくて、異邦人をも神の子として「新たに生まれ」(ヨハ 3:3)させて、「(神の国を)一緒に受け継ぐ者」(エフェ 3:6)とならせてくださいました。私たちは今や「神によって立てられた相続人でもあるのです。」

ですから私たちキリスト者は、将来の神の国の到来が歴史の目標(フィリ 3:14)であって、決して神話でもおとぎ話でもないことを知らなければなりません。神の母となったマリアが歴史上の實在の女であるように、教会が神の国を受け継ぐ将来も確かに歴史の目標なのです。

## 2. 民

捕囚から帰ったユダヤ人たちによって再建されたエルサレムの(第二)神殿で、アロンの子孫である大祭司は朝のいけにえをささげる度ごとに、「イスラエルの全会衆の上に両手を差し伸べ、自らの唇をもって主の祝福を与え、誇らかに主の御名を唱えた」(シラ 50:20)とされています。その起源は古く、今朝の答唱詩編である 67 編にもこのアロンの祝福が歌われています。

w.22-23 「主はモーセに仰せになった。アロンとその子らに言いなさい。」

神はその民を祝福するための器として、祭司たちをお選びになりました。

この祝福が、今や御子イエス・キリストによってすべての民に及ぶものとなったことを、私たち教会は聞いているのです。

「知ってのとおり、あなたがたが先祖伝来のむなしい生活から贖われたのは、金や銀のような朽ち果てるものにはよらず、きずや汚れのない小羊のようなキリストの尊い血によるのです。」(1ペト 1:18-19)

「神はわたしたちを憐れみの器として、ユダヤ人からだけでなく、異邦人の中からも召し出してください

ました。」(ロマ9:24)

この御子の誕生のための器として、マリアは神の母として選ばれました。

### 3. ルカ

聖書は神の母マリアを、ごく普通の女の一人として描いています。彼女が他の人々とは違う特別な天性を備えていたというのではなく、そうではなくて「神から恵みをいただいた」(ルカ1:30)と語っています。彼女は自らの有能や卓越によって神の母となったものではありませんでした。彼女の思いや理解をはるかに超えた神の選びが、彼女を御子の母にしたのでした。

v.19 「しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。」

私たち教会はこの聖母マリアと共に、人間の思いや理解をはるかに超えたキリストの再臨と御国の到来を、信じて待っているのです。                      アーメン、ハレルヤ。

# 1月5日 主の公現

イザ 60:1～6 エフェ 3:2～6 マタ 2:1～12

## 1. マタ

ユダヤ人の王としてお生まれになった方のところに、東の方の国から占星術の学者たちが訪れて来て、無事に礼拝と奉獻をささげて帰って行きました。神の秘められた計画(ミステリーオン)が御子の受肉によって動き始めたことの最も象徴的な出来事として、教会は早くから主の公現の祭日を降誕節の中に位置づけて祝って来ました。

ですから教会は、異邦人の救いが主の受肉から始まって、新しいイスラエルとしての教会を造り上げて行く時代が到来したことを、この公現の祭りによって宣言して来たのだと言うことが出来ます。こうして主の公現の祭日は主の降誕の単なる後祭りではなくて、教会の時代の開始を告げる祭りなのです。

そのような訳で、東の国の学者たちの来訪の出来事は、クリスマスの祝いの中の一つのエピソードのように扱われてしまってはなりません。またこの物語りが語られると、それで主の降誕の祝いが幕を下ろすように考えて、さっさとクリスマスの飾り付けを片づけてしまうことは、適切ではないのです。典礼暦は降誕節を“主の洗礼の祝日まで”と定めています。

## 2. イザ

捕囚から帰還した人々によるエルサレムの神殿再建が始まった頃に語られた第三イザヤの言葉が、古くから主の公現の祭日の第一朗読のために選ばれていたようです。それはこの調子高い希望に満ちた預言が、教会を通しての神の秘められた計画の展開に見事に当てはまると、そう理解されたからでありましょう。実に、キリストの祭壇を囲んでミサをささげる地上の教会の上に「主が輝き出で、主の栄光が現れる」(v.2)こと、そして全世界の民がこのキリストの光に向かって集まって来て、共にミサをささげる民に加えられることを、代々の教会は信じて来ました。

私たちが今朝再び主の光に向かって目を上げ、主の公現の祭日を祝って、代々の教会と共にこの預言の朗読に耳を傾けます。この預言は決して今日の祭日一日間だけしか有効期間がないものではなくて、再臨のキリストが実現してくださる神の国までをその射程に納めています。ヨハネ黙示録の 21:22 以下には、既にこのイザヤ書 60 章の預言の完成する姿が描かれているのです。

## 3. エフェ

私たちが現在使っている「洗礼式の信仰宣言」と「使徒信条」では、“聖なる普遍の教会”を信じると表現されていますが、実はこれは原文では“聖なるカトリック教会”となっているもので、「ニケア・コンスタンチノーブル信条」ではこれを「一・聖・公・使徒継承の教会」と、より丁寧に述べています。本来諸信条

にある“カトリック”という言葉は、“非分派的”あるいは“正統的”という意味で用いられたのでした。ですからカトリックの信者にとって教会とは「一・聖・公・使徒継承の教会」以外にはあり得ないということを、私たちは再確認したいと思うのです。

「キリストの聖なる使徒たちに啓示された」(v.5)「秘められた計画(ミステーション)」(v.3)は、現代の教会に使徒継承によって受け継がれて来ています。この使徒継承なしには、教会は真の教会たり得ないことを、真の福音はただ使徒たちから伝えられた福音以外には存在し得ないことを、現代のキリスト者は理解しなければなりません。

それは「キリストによって実現される計画」(v.4)であり、「異邦人が福音によってキリスト・イエスにおいて、約束されたものをわたしたち(ユダヤ人)と一緒に受け継ぐ者、同じ体に属する者、同じ約束にあずかる者となるということです。」(v.6)

私たちは主の公現の祭日に、このキリストの御業に目を向けます。“イエス・キリストはきのうも今日も、また永遠に変わることはない方(ヘブ3:8)” なのですから。

アーメン、ハレルヤ。

# 1月12日 主の洗礼

イザ 55:1~11    |ヨハ 5:1~9    マコ 1:7~11

## 1. マコ

v.9 「そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。」

降誕節の最後の祝日として主の洗礼の出来事をミサで記念することは、元来は西方教会の典礼暦の知らないことでありました。第二バチカン公会議後のカトリック教会の典礼刷新は、典礼暦についても大胆な刷新を行い、東方教会が古くから主の公現の祭日に記念していた主の洗礼の出来事を、新しい典礼暦の降誕節の最後の主日で祝うことにしました。そしてその翌日から四旬節が始まるまでの期間を、聖霊降臨の主日の翌日から待降節第一主日の前日までの期間と共に、新しく“年間”と呼ぶことにしたのでした。

主の降誕が、神の国の相続人である新しいイスラエルとしての教会を造り上げて行く時代の到来を告げる出来事であったことを、より鮮明にしようとする現在の降誕節の意図に、私たちは注目したいと思います。御子は、飼い葉桶に寝かされた乳飲み子のままで、降誕節が終わるとまた来年までそのまま記憶の外に“仕舞っておかれる”ような方ではないのだと、現在の典礼暦は主張しているのですから。

御子イエスはヨルダン川でヨハネから洗礼を受けて、救い主としての公生涯を歩み始められたのでした。

## 2. |ヨハ

v.6 「この方は、水と血を通して来られた方、イエス・キリストです。」

水とは主の洗礼の出来事を、血とは主の受難の出来事を指しています。

今日、イエスは歴史上の実在の人物であったかと問われれば、大部分の人は躊躇なく“そう思う”と答えることでしょう。しかし“キリストであるイエス”、“受肉した神の子であるイエス”が来られたと信じるかと問われると、もしかしたら答えに迷う信者、確信の持てない信者が多く存在するのではないのでしょうか。

教会はその宣べ伝えるイエス・キリストについて、主の洗礼の出来事と受難の出来事を指し示すことによって、正しく信じることを人々に教えて来たのでした。

v.6 「そして、“霊”はこのことを証しする方です。“霊”は真理だからです。」

イエスの誕生に“神の子の受肉”を信じることの出来ない人々が、いつの時代にもいました。教会は自らをそのような人々から明確に区別することによって、使徒継承の福音に固執して来たのでした。現代のカトリック教会の典礼暦において降誕節が証しているものは、正にこの福音理解なのです。

v.1 「イエスがメシアであると信じる人は皆、神から生まれた者です。そして、生んでくださった方を愛する人は皆、その方から生まれた者をも愛します。」

すべて洗礼を受けたキリスト者は、イエス・キリストに接木された(ロマ 11:17)神の子であって(ロマ 8:14)、神の国の相続人(ロマ 8:17)なのですから、共に神の国の恵みに与かる(フィリ 1:7)兄弟たちと互いに

愛し合うという掟(ヨハ3:23)を守ります。

### 3. イザ

私たちにとって“神のことば”とはキリストの福音のことです。それはキリストによって実現される“神の秘められた計画”(エフェ3:6)であって、私たちキリスト者は「このような希望によって救われているのです」(ロマ8:24)。

第二イザヤの希望に満ちた呼びかけが、現代の闇の中に住む私たちに今朝向けられています。

v.3 「耳を傾けて聞き、わたしのもとに来るがよい。聞き従って、魂に命を得よ。」

v.7 「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。わたしたちの神に立ち帰るならば、豊かに赦してください。」

v.11 「そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も、むなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす。」

私たちはこの呼びかけを、主の洗礼の祝日に、聞かされています。

アーメン、ハレルヤ。

## 1月19日 年間第2主日

サム上 3:1~19    Iコリ 6:12~20    ヨハ 1:35~42

### 1. ヨハ

v.35-36 「その翌日、また、ヨハネは二人の弟子と一緒にいた。そして、歩いておられるイエスを見つめて、「見よ、神の小羊だ」と言った。」

二人の弟子が、ヨハネのこの言葉を聞いてイエスに従いました。彼らがイエスを追いかけて行くと、イエスは振り返り、「来なさい」と言われました。彼らはこうしてメシア(救い主)としてのイエスに出会ったのでした。続いてアンデレは「私たちはメシアに出会った」と言って、自分の兄弟のシモンをイエスのところに連れて行きます。同様にイエスの弟子となったフィリポも同郷の人ナタナエルに、「来て、見なさい」と言い、そのようにしてイエスの最初の弟子たちが集められて行きました。

ヨハネ福音書は、彼らがナザレのイエスの人間的魅力に心ひかれたとか、あるいはイエスの社会的人道的言動に共感したなどとは全く述べていません。彼らは神の小羊であるイエス、メシアであるイエスに出会い、その弟子となったのでした。

教会は使徒たちの宣教を土台として成り立っているのであって、その宣教のかなめ石はキリスト(救い主)であるイエス御自身です(エフェ 2:20)。教会はいつの時代にも「見よ、神の小羊だ」とキリストを指し示し、「私たちはメシアに出会った」と証言することによって、キリストの教会であり続けて来ました。信者たちが「来て、見なさい」と人々に呼びかけることは、キリストの体である教会を造り上げて行く(エフェ 4:12)生きた石として用いられること(1ペト 2:5)なのです。

### 2.

私たち現代のキリスト者は、自分のこれまでの信者としての人生を振り返ってみて、「見よ、神の小羊だ」「私たちはメシアに出会った」というような明確で確信に満ちたキリスト証言を聞いて育てて来たでしょうか。ありのままの20世紀は、人々の口からそのような証言を聞くことの絶えて久しい時代でありました。受肉された神の子イエス、十字架の血によって私たちを贖ってくださった復活のキリストへの信仰の確かさが、深い霧の中に隠されて曖昧になり、人々は不安と不確かさの中で「飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれて」(マタ 9:36) 歩んで来ました。自らがそのような状態であることを十分に承知しながら、外部の人々に向かって「来て、見なさい」と呼びかけることの空しさを、私たちは体験して来たのではないのでしょうか。

これは事実であって、私たちが弁解したり取り繕ったりして済ますことの出来るようなものではありません。教会にとって20世紀とは、そのような時代でありました。そのような教会の罪を直視し、これを会衆一同が共に全身で負って、21世紀の教会は主の前に立っているのです。私たちがミサで歌う“あわれみの賛

歌”は、このような過去から新しい希望に満ちた21世紀への脱出を願う教会の祈りでもあります。

### 3. サムエル

v.1 「少年サムエルはエリのもとで主に仕えていた。そのころ、主の言葉が臨むことは少なく、幻が示されることもまれであった。」

この物語りの場面が、私たちにとっての現代という時代と通じること注目しましょう。シロの祭司エリは非常に年寄り(2:22)、目がかすんで来て見えなくなっていました(v.2)。しかし神は、少年サムエルを主の預言者として立ち上がらせるために、彼に決定的な役割をお与えになりました。

vv.8-9 「エリは、少年を呼ばれたのは主であると悟り、サムエルに言った。“戻って寝なさい。もしまだ呼びかけられたら、『主よ、お話しください。僕は聞いております』と言いなさい。”」

神に聞く、神のことばに聞くことの再発見によって、神の民イスラエルの新しい時代が展開することとなりました。

私たちは21世紀の教会について、主がこれをあわれんでくださり、「神の変わることはない生きた言葉」(1ペト1:23)によって再び立ち上がらせてくださることを願っています。しかしそれは決して、20世紀を含む過去の教会の否定の上に成り立つものではないことを、よく理解しなければなりません。私たちはキリストの祭壇や聖書朗読台を軽んじたり否定してはなりません。聖職位階制度の軽視や、さらに教会の使徒継承への無理解や無関心の上には、神のことばに聞く教会の再生は決して起こり得ないことを、サムエルとエリの物語りは私たちに警告しています。

v.10 「どうぞお話しください。僕は聞いております。」

主は、共にミサをささげる私たち一人一人にも、このような信仰の姿勢を今朝求めておられます。

アーメン、ハレルヤ。



## 1月26日 年間第3主日

ヨナ 3:1~10    コリ 7:29~31    マコ 1:14~20

### 1. マコ

ヨハネが捕えられた後、イエスは公の活動を始められます。イエスの宣教とは次のようなものであったと、マルコ福音書は私たちに伝えてくれています。

vv.14-15 「イエスは…… 神の福音を宣べ伝えて、“時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい”と言われた。」

旧約聖書の預言とそこで語られた神の約束は実現し、今や神の救済史が新しい段階に入る“時は満ちた”という福音理解は、新約聖書全体を貫いているものであって、それがイエス・キリストの到来によって起こったと使徒たちは宣べ伝えたのでした。

「神の国は近づいた」とは、イエスの到来とその公の活動によって、既に半ば神の国は来ているということと、その完成である終末の日が今や切迫しているという二つの事柄を含んでいます。悔い改めて福音を信じる時は短く、それは急を要するのです。

福音とは、神の子イエス・キリストによる救いの知らせであって、使徒たちに指導された初代教会が全世界に向かって宣べ伝えたものです(マコ 16:15-16)。今朝私たちは再び聖書を通して、この福音を「悔い改めて…… 信じなさい」と語りかけられています。

聖書を文学書の一つのように読む人は、かつてナザレのイエスは民衆に向かってどんな福音を語られたのだろうか、過去のある日の場面を空想するかもしれません。しかし共にミサをささげるために集まるキリストの教会は、聖書を通して現代に語りかける神のこゝろを聞くのです。それはイエス・キリストによる救いの福音の宣教であり、御子イエス・キリストに関する福音(ロマ 1:3)への招きです。現代の教会は今なお「時は満ち、神の国は近づいた」という時の中に置かれているのですから、私たちには悔い改めて福音を信じる時間がまだ残されているのです。

### 2.

各福音書はイエスの最初の弟子たちの招きに関するいろいろな物語りを伝えていきます。マルコ福音書は最初の四人の弟子たちが、ガリラヤ湖での漁師としての仕事の、正にその場面の中から呼び出されたことを伝えました。それは後に使徒と呼ばれるようになった人々の単なる過去の思い出としてではなくて、それ以上のものとして私たちに語りかけます。時は満ち、神の国は近づいたという状況の中で、私たちが悔い改めてキリストの福音を信じるとはこういうことなのだ、マルコ福音書は語っているのです。

彼らが既にそれまでにイエスの話を、直接にあるいは間接に聞いたりしていたであろうことが十分に推測出来るのですが、私たちが注目すべき点は彼らがイエスに呼び出されると、直ちに仕事をそこに残して従ったということです。

人々が福音を聞く、福音を信じることが使徒たちの宣教の目的であって、この宣教によって再臨のキリストを待つ初代教会(フィリ3:20-21)が育って行きました。この教会の信仰の姿勢を典型的に表しているのが、「マラナ・タ(主よ、来てください)」(I コリ16:22、黙22:20)という祈りです。

### 3. ヨナ

ヨナの説教を聞いて悔い改めたニネベの人々には、迫り来る神の怒りを免れるための切迫感がありました。そのように、現代の教会が福音を聞くということは、今や時が満ち、神の国が近づいているという切迫感を理解することと不可分の関係にあります。私たちがイエス・キリストを信じて、その血による贖い、罪の赦しを受けたのは、キリストの再臨の日に備えてのことです。そしてその日は近いのです。

### 4. I コリ

使徒パウロはコリントの教会の人々に助言を書き送るに際して、その根拠として「この世の有り様は過ぎ去るからです」(v.31)と述べました。神の国は近づいたという福音が、キリスト者の日常生活を、外見よりもむしろその質において変化させました。

ガリラヤ湖のあの漁師たちが、その家業をこれまで通りに続けながら、既にイエスが呼び出される日には、直ちにその仕事を残して従う者になっていたというマルコ福音書の物語りに、初代教会のキリスト者が共感を覚えた様子が目に浮かぶようです。

この同じ福音、神の子イエス・キリストの福音(マコ1:1)、御国の福音(マタ4:23)を、現代の教会は今朝再び聞いています。主の忍耐によって(II ペト3:9)、現代の教会は今なお「時は満ち、神の国は近づいた」という「時」の中に置かれているのです。

アーメン、ハレルヤ。